

荒木一郎

araki ichirō



後ろ向きの
ジョーカー

ushiro muki no joker

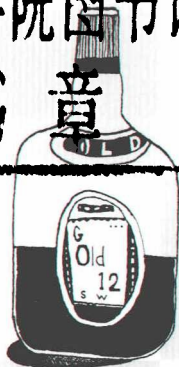
新潮社

荒木一郎

araki ichirō

工業学院図書館

蔵書章



後ろ向きの
ジョーカー

ushiro muki no joker

新潮社

うしむ
後ろ向きのジョーカー

著者 荒木一郎

発行 1997年 8月20日

発行者 佐藤隆信

発行所 株式会社新潮社

〒162-8711 東京都新宿区矢来町71

振替00140-5-808

電話：編集部 (03) 3266-5411

読者係 (03) 3266-5111

印刷所 二光印刷株式会社

製本所 大日製本印刷株式会社

© Ichiro Araki 1997, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。
送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-418701-1 C0093

価格はカバーに表示してあります。



後ろ向きのジョーカー

小峰譲次が初めて新宿のライブスナック「ツナ」に出演したのは、昭和五十五年の春もまだ寒い頃だった。

ライブと言っても六丁目の裏にある「ツナ」は表に看板もなく、一見の客を寄せ付けない禁酒法時代のアメリカを風靡したもぐりの酒場、スピークイージーを居酒屋風にしようとしたような作りになっていた。昼間、この裏通りを抜ける通行人がいても、そこにライブハウスどころか、店があることすら気が付かなかっただろう。

夕方の七時をまわる頃に、薄汚れた木造の扉のど真ん中にある青銅で出来たノッカーを叩くと、覗き窓が開いて木戸番のタケシが客の顔を確かめ、異存がなければ重たい扉をかすかな軋み音と共に開けてくれる。

「ツナ」の出し物というと、ほとんどがマンネリ化したような退屈なもので、おかまのストリップとか下手な漫談の類が多く、音楽などは、年寄りのバイオリン弾き兼吟遊詩人の弾き語

りによってお茶をにごすくらいで、ほとんどは店主の作る関西風地卵入りの雑炊と、店主本人の魅力によって店は成り立っていた。

しかし、小峰譲次が出演するようになった五十五年から、「ツナ」は様変わりをしていった。それまでは、ちらほらいるアベック客と天井から壁にかかった大きな地曳き網と、そして、店内を照らすロウソクの光とが「ツナ」の雰囲気醸し出していたのだが、夏になるに連れて、譲次の出る夜は老若男女を問わず次第に客の数が増え、いつのまにか熱気がむんむんする大入りの客席が「ツナ」のイメージにかわっていった。といっても、元々収容人員が五十人を超えれば、ビール瓶のケースに雑誌を載せたものが配られ客席代わりになるのだから、大入りといったってたかが知れてはいた。

小峰譲次はいわゆるジョーカーである。少なくとも譲次自身と木戸番のタケシだけはそう信じていた。ジョーカーとはその名のとおりジョークを言う人の意味だが、コメディアンとかボードビリアンは、差別とまでは行かないが古い称号で、仲間うちで許せるほどの芸を持っているならばエンターテイナーと称された。

そして、そのエンターテイナーの中でも傑出した存在であると認められる数少ない芸人に対して、彼らは畏敬の念を込めて、モノホンの芸人、つまり、ジョーカーの称号を与えていた。

五十五年というと、数多くのコメディアンが台頭してきた時代で、テレビでは、萩本欽一が演出・主演するテレビ番組、「欽ちゃんのどこまでやるの!」、いわゆる、「キンドコ」がこの世の春を謳歌していた。また、一世を風靡したお笑い番組「笑っていいとも」の前身、「笑っ

てる場合ですよ」や「お笑いスター誕生」などが始まり、お笑いタレントと称されるコメディアンたちが日替わりでテレビに総出演し、世の中は、洗練された芸より素人風しろうとの宴会芸の方がもてはやされる、お笑い新人タレントの戦国時代へと突入していた。

「ジョーさん、そろそろ出番ですよ」

狭い楽屋でひっくり返ってテレビに見入っていた譲次は、木戸番の木村タケシが声をかけた。「どう思うよタケシ」

「なんすか」

「テレビだよ、見たことあんだろ、これ」

と、立ち上がって画面をうながす譲次。

「キンドコですか」

と、嬉しそうに笑うタケシ。

「お前、お笑いタレントになりてえんだろ」

「そりゃ、もう」

ハンガーにかかっていたチェックの上着を外して背中に引っ掛けると、譲次は鏡に向かって剃り残しの髭をあたりはじめた。

「こいつが、テレビと客をダメにしてってる仕掛け人だよ」

「こいつって……、こいつですか」

「素人担ぎ出して片っ端からテレビに出したんじゃ芸人も芸を磨かなくなるし、客にも上手い

拙い^ずがわかんなくなっちまう。人が笑えばいいってもんじゃねえんだよ。猫のツラ見てるだけだつて人は笑えるんだ。意味不明に鳴く牛や山羊をスタジオに連れて来ただけでな、笑いなんぞは山ほど沸かせられるつもんさ」

「欽ちゃんだつて言つてますよ。ただ笑つてもらうだけじゃダメだつて、笑いながらも優しさとか悲しさとか、いろんな感情を表現したいつて、ここに書いてありますよ」

タケシがその日の夕刊を拵^{こしら}へてみせた。「牛、スタジオに連れてきて、優しさとか悲しさなんか出ないんじゃないんすか」

「オレの言いたいのはな、タケシ、そう言う事じゃねえんだよ。客が芸人を育てるんだ。だから、テレビやテレビに出る芸人が客に本物を見せていかなきゃ、笑いを支える客の目が狂っちゃう。芸のない芸人見せられて、それで、客が満足させられちゃうようになりや、芸人は芸を磨いたつて意味がなくなっちまう。日本で国からモノホンはだんだん消えてっちゃうつてわけさ。そうだろ、タケシ」

「はい。でも、欽ちゃんは」

「欽ちゃん、そんなに好きか、タケシ」

「好きです」

「俺はどうだ」

「好きす。カッコいいつす」

音楽が鳴り出した。譲次の出はロックと、客の手拍子で始まっていく。

「いくぞ、タケシ」

上着をひるがえして、讓次が振り返った。

「お願いしまッす」

讓次は、二十代の終わりまでは役者になろうと修業をしていたという。

紫煙にけむった「ツナ」の狭い空間に、手拍子に乗って熱気が膨張していく。突然スポットが当たると、小峰讓次のスマートな体が浮かび上がった。

「みんなァ」

讓次が叫ぶ。

「おおっ」

と、客が、個々に反応する。

「ここは何処だァ」

踊るようにして、舞台から客に呼び掛ける讓次独特のジェスチャーが、ますます客の興奮を
あおり立てる。客は口々に、「ツナだ」とか、「地球だ」とか応えている。

「おまえは誰だァ」

「客だァ」

「オレは、オレは、俺はーっ」

と、客に向かって両手をいっぱいに拡げる讓次。

「小峰ジョージだァ」

と、手を差し伸べる客たち。

タケシの操るスポットが譲次と共に踊り、まるで、ロック歌手の登場と何等かわらない。かわらないどころか、それ以上の何かが小峰譲次のステージをつつんで行く。そして、譲次のソ口にと移って行った。

俺はさ、見たとおり二枚目だろ。「だからさ」って、木戸番のタケシに話したのよ。「役者になろうってんでニューヨークに行って、何を隠そう、向こうの学校にも通ったのよ」ってな、「ニコラス・ケージとんざ、おまえ、連れションした仲ってことさ。すげえだろ」つつたら、タケシがさ、「ジョーさん、向こうで警察学校入ってたんすか、すげえな」って、驚いてんだよ。「おまえ、誰が警察学校つったよ」つたら、「だって、刑事と一緒に便所入ったって言ったじゃないすか」「おまえさ、ニコラス・ケージ知らないの、コッポラの親戚のさ、役者だよニコラス・ケージって」

四丁目の角の二階にある喫茶店には、汚れた新宿の空気を通してだが、十月の午後の陽射しが柔らかく入り込んで来ていた。

顔の半分を煤払いで覆ったような「ツナ」の店主、鶴田喜八が、そのヒゲについたコーヒーを拭くために、おしぼりをひろげながら譲次に訊ねた。

「今月も、ギャラは、いつもんとこ振り込んだいたらええのんか？」

向かいにすわって、口を曲げて煙草の煙をなんとか三角にして出す工夫をしていた譲次は、

鶴田に向かってオリンピックの選手宣誓をする様なしぐさで片手を上げ、了解の合図を示した。「それにしても、稼ぎをみんなかみさんとこに振り込んでもうて、自分の生活費は大丈夫なんか？」

譲次が、口をゆがめ煙をポツポツと吐きながら、小指を立ててみせた。

「おなごか、おまえ、昔からようもてるもんなんア。そやけど……」

鶴田はコーヒーをぬぐったついでに、顔全体をおしほりで拭きはじめた。

「おなごからもらうだけやったら、いくらもならんやろ」

譲次は煙を吐きながら人さし指を示すと、自分の鼻をはじいてみせた。

「ふーん、ばくちか」

と、鶴田が言った。

譲次はしゃべりの才とは別に、何故か競馬に強く、仲間うちの金を集めては配当を出してやるようなことも時々やっていた。そのおこぼれにあずかつてる仲間のひとりでもある鶴田は、納得したのか、何度かうなずきながらテーブルにおしほりを置き、コーヒーの残りを啜るようにして飲み干した。

「そやけど、おまえも不思議なやつだな。なんで、そないしてまで、かみさんに尽くさなアカンのや。おなごはあまり甘やかすとロクなことにならへんで、そやろ、そうは思わんのんか。ま、今月もおかげさんでギョウサン客を入れてもろたし、こないなと言える義理も権利もあらへんのやけどな」

仕事の稼ぎはすべて女房の口座に入れる。遊ぶ金は一銭も家計からは使わない。そのかわり、女のことだとやかく言わせない。好き勝手をさせてもらう。それが、小峰讓次のモットーだった。

「母性本能よ、親父」

吐いた煙の輪を右手でギュッとつかむと、讓次が口を開いた。

「母性本能……って、あれか？　そういうのんが好みなんか、おまえ」

「親父にだってあるだろう、守るもんが。人には理解できない親父だけの大事なもんがさ。たとえば、ツナがいくら赤字になっても潰さない、閉じないって。オレはね、アメリカで学んだのよ、女のことを。骨のことを英語でなんて言うか知ってるか、親父」

「骨か、なんや、いきなり……ボーンやったかな」

「出来るじゃねえか、親父。じゃ、生まれることは、なんてんだ？」

「そうやな、やつぱり、ボーンか」

「そういうこと！」

それがどうしたという顔で、鶴田が讓次の顔をみつめた。

「その昔、宇宙の神はさ、地球に最初の人間として男を作ったんだ。それから、次に神がやった偉大な行為は、女をこの世に誕生させたってことだ。どうやって女が作られたか知ってるか。神は、男のあばら骨を一本取って、そこから女を誕生させたんだ。だからボーンとボーンはおんなじ言葉になったってわけさ」

人のよさそうな鶴田の顔が、きつねにつままれたように歪んだ。

「大丈夫、話はここじゃ終わらない。ところで、親父、生まれた子供は誰が守る？ カラスじゃないよ、ナスでもない、まして糸ミミズでもない、としたら……ピンポン！　そうよ、親父、母親だよ。産んだ母親が守らなくてどこの誰が守るんだよ。女を守りたいって気持ちってのはさ、男が持つてる母性本能よ。太古の昔から男は女の母親だつて、そう相場が決まってるんだよ、親父」

難しい顔つきで聞いていた鶴田の表情が崩れると、煙草のやにで黄色くなった歯と歯の間から、フツフツと嬉しそうな笑いがこぼれてきた。

「そうか、やっぱりおまえは天才やね、フツフツ、男の母性本能か……妙に納得させられる話やな」

ひとしきり感心してうなずいていた鶴田は、ふと、思い出したのか、

「そうや」

と、話をついだ。

「バルセーヌ、知つとるやろ。あつこから話があつてな、譲次をよこさんかつて」

「俺を……」

「ああ、どこぞでおまえの評判聞いたんやろ、先週言うて来よったんや」

「それだよ、きつと」

と、譲次が背を伸ばして、椅子に寄り掛かった。

「なんぞあったんか」

「昨夜も来てたんだけどさ。夏の終り頃からかな、人を値踏みでもするような目つきで見にくる女の客がいるんだ。赤い縁の、きつねみたいな眼鏡かけてさ、いつも髪をアップにしてターバンみたいにスカーフで巻いてんだよ。気にはなってたんだけど、オレの趣味じゃねえしさ、まいったなあつて思ってたんだよ」

「ふーん、そんなんが来とったんか」

鶴田は、指であごのヒゲをこすっていたが、

「それでな、わしは、本人の意志次第やいうといたんやけど、どうする、おまえ」と、譲次をのぞきこんだ。

「親父、情けないね。俺は天下のジョーカー、小峰譲次だよ。いくらベルセーヌが流行ってるからって、たかだか新宿界限で人気があるってだけじゃねえか。俺はね、親父、もっとでかいものを狙ってんのよ。萩本欽一なんかが率いる素人集団や素人漫才にテレビが乗っ取られ、真の芸人の世界が破壊されようって、そんなときによ、たかがベルセーヌなんかにこだわってられねえんだよ。テレビも、世間も、モノホン小峰譲次の登場を今か今かと待ち望んでるつてのによ。だから、親父、先方にはつきりと断わってくれよ、この話、なかったことにしてくれって」

「まあ、譲次、歌舞伎町のベルセーヌいうたらライブハウスとしたって群を抜いてる存在やし、うちと比べりゃ月とスッポンや。そう言うてくれる気持ちには有り難いんやけど、今のおまえの

ことを考えると、わしへの義理より……」

「ありがタイなら、芋ムシヤクジラ、百足^{ひかで}汽車ならハエは鳥つてね。親父、義理や人情で言っ
てんじゃねえんだよ。ジユクの譲次か、世界の譲次かって話、わかんねえかなあ。とにかく、
はつきり断わつといてくれよ、親父」

と、テーブルに置いたサングラスを持つと、

「ナオンが来たんで悪いけど」

譲次は、入ってきた白いワンピースの女に手をあげて立ち上がった。女は、二十七、八歳で
すらりとしたどちらかと言えはやせ形で顔が小さく、博多人形のようなままとまった顔立ちをし
ていた。入り口の方を慌てて見る鶴田を尻目に、譲次は、こっちに気が付いて笑いかけた女に
向かって「へーい、真澄ちゃん」と、オーバーに両手を広げて近づいていった。

その年も十二月に入ると、イラン・イラク戦争を契機とするオイルショックのせいか、巷に
は不況の臭いが一段と強く感じられるようになっていた。

新聞では、相変わらず暴力事件や議員の汚職のニュースなどが紙面をにぎわしていた。

中でも、元ビートルズのジョン・レノンがハワイ出身の熱狂的なファンである青年にピスト
ルで射殺されたニュースは、音楽ファンだけではなく多くの人たちにショックを与えていた。

だが、なんとといっても、この年の日本の大衆にとっての興味は、三月に婚約発表し十月五日
の武道館コンサートで「しあわせになります」の言葉を最後に一切の芸能活動から引退した歌

手の山口百恵と、そのわずか七カ月の間に、ポスト百恵としてデビューしトップアイドルにまで成り上がっていった松田聖子に対する方がはるかに勝っているようだった。週刊誌やスポーツ新聞などをはじめ、漫才やお笑いの連中の格好のネタとしても、あちらこちらのテレビ番組が扱っていた。

小峰譲次にとっては、そうしたニュースより横山やすしと西川きよしの話芸に芸術祭賞が与えられたことのほうが、身近な脅威になっていた。今年の春頃から火が点きだした漫才ブームに、ますます拍車がかかる気がしたからだ。

テレビでは「キンドコ」をはじめとする一連の萩本欽一ものが相変わらずの高視聴率を維持する傍ら、この年人気が出てきた漫才コンビの数にはすさまじいものがあった。

これまでの年配客が支配していた演芸場では受け入れられなかったB & Bやセント・ルイス、ザ・ぼんちにおぼんこぼん、西川のりお・上方よしお、紳助・竜介そしてツービートなどなど、若手漫才師たちがテレビというメディアによって花開き、漫才ブームはこの年の暮れが近づくに連れ、頂点へと向かっていた。まさに、一人でしゃべるより、二人でしゃべりさえすれば優遇される時代になって来た感があった。

「ジョーさん、また、赤い縁の眼鏡かけた女が客席にいますよ」

と、木村タケシが楽屋に入ってきて、譲次に告げた。

「ネタを見てみろ、タケシ」

テレビをじっと見詰めながら譲次がいった。